

大日本教育会附属書籍館：1887(明治 20)年開館 （現在の千代田区立図書館）

<https://www.library.chiyoda.tokyo.jp/about/history/>

1887年(明治20年)	大日本教育会附属書籍館として神田区一ツ橋通町の旧体操伝習所寄宿舍内に開館
1911年(明治44年)	東京市に委託され東京市立神田簡易図書館として開館(大正2年に一橋図書館と改称)
1923年(大正12年)	関東大震災により焼失翌年ニコライ堂敷地にバラックで開館
1929年(昭和4年)	一橋図書館から名称を駿河台図書館と改称 翌年(昭和5年)から一般公開開始
1934年(昭和9年)	内田嘉吉文庫受託
1943年(昭和18年)	市立駿河台図書館は都立となる(昭和25年から区立へ)

京都府立図書館：1898(明治31)年6月開設

http://www.library.pref.kyoto.jp/?page_id=77

明治6年(1873)5月～ 明治15年(1882)3月	京都府が集書院を三条高倉西に開設。建物延べ面積約500坪。府立図書館の前身といわれている。
明治31年(1898)6月	「京都府立図書館」開設(京都御苑内博覧会協会東館85坪を借受)初代館長：三宅五郎三郎
明治36年(1903)10月	巡回文庫制度を開始
明治37年(1904)10月	『和漢図書分類法』(十進分類法)作成、採用
明治38年(1905)4月	児童室を設け無料公開
明治42年(1909)4月	「京都府立京都図書館」現岡崎の地にて蔵書5万冊で開館。設計者は武田五一。概要：レンガ造3階建、延べ面積772坪。閲覧室は普通・特別・図案・新聞・婦人・児童、3階に講演室・研究室を兼ねて二陳列室。書庫は木造4層構造。
大正14年(1925)3月	児童室を閉鎖して書庫に転用
昭和3年(1928)4月	個人貸出開始
昭和8年(1933)10月	京都府中央図書館に指定(*図書館令の改正と同時)



https://www.library.pref.kyoto.jp/wp/wp-content/uploads/2015/11/h_02.jpg

https://www.library.pref.kyoto.jp/wp/wp-content/uploads/2015/11/h_03.jpg

https://www.library.pref.kyoto.jp/wp/wp-content/uploads/2015/11/h_01.jpg

秋田県立図書館：1899(明治 32)年 11 月開館

<http://www.apl.pref.akita.jp/about/enkaku.html>

明治 32 年 4 月	県立秋田図書館を秋田市千秋公園内に設置。秋田図書館規則を公布。11 月開館
明治 35 年 10 月	わが国最初の巡回文庫を開設
大正 7 年 10 月	秋田市東根小屋町に新館落成、8 月 6 日開館
大正 12 年 4 月	郡制廃止により大館（北秋田郡）、能代（山本郡）、土崎（南秋田郡）、本荘（由利郡）、大曲（仙北郡）、横手（平鹿郡）の郡立図書館及び花輪を分館とする
昭和 7 年 3 月	分館を地元町へ移管
昭和 8 年 9 月	図書館令一部改正により秋田県中央図書館に指定される（昭和 25 年廃止）

成田山仏教図書館：1902(明治 35)年 2 月開館

<https://www.naritasanlib.jp/概要/>

当館は、成田山中興第 15 世貫首石川照勤僧正により、明治 34 年(1901)に千葉県下で初の図書館として設立され、翌 35 年一般に開館公開した図書館です。

初代館長であった石川照勤は、設立開申書の中で「私儀コノ度公衆ノ閲覧ニ供センガ為メ内外ノ図書ヲ蒐集シ私立成田図書館ヲ設置仕候条此段及開申候也」と記しました。この設立の精神は、「成田山の宗教的使命達成と、地方文化向上のため」「我が国の精神文化の向上のため」であり、現在もその基本方針に変わりはありません。

1901.1 (明治 34 年)	文部大臣に図書館設置のための開申書を提出。 石川照勤が初代館長に就任。
1902.2	石川館長の蔵書および全国から寄贈された図書、計 15500 冊にて開館。
1905.2	館外帯出を開始。
1907.6	3 階建てレンガ造りの書庫が落成 (以降、書庫落成日の 6 月 9 日を創立記念日と定める)。

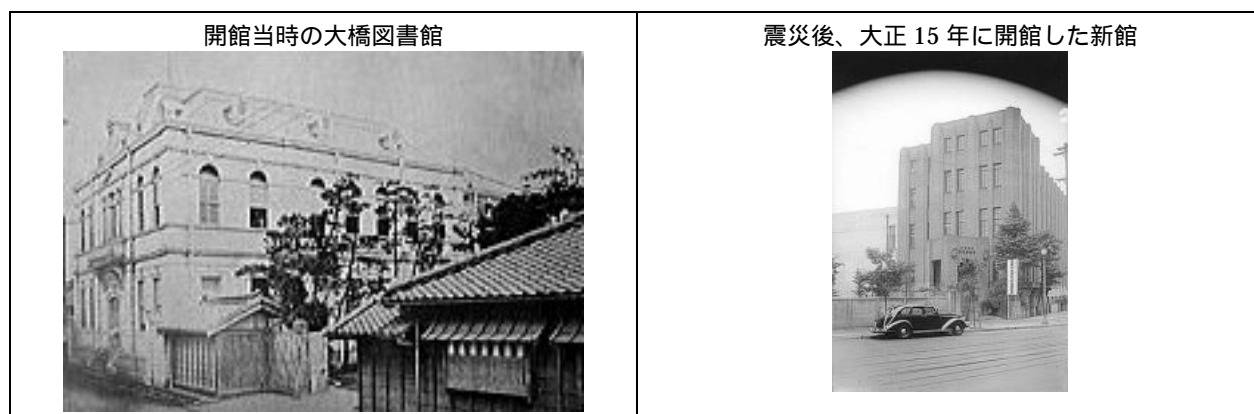
大橋図書館：（現在の三康図書館）

<http://sanko-bunka-kenkyujo.or.jp/sanko-toshokan/sankotoshokan.html>

三康図書館は大橋図書館の蔵書を継承して発足した図書館です。
大橋図書館は、明治 34 年 2 月博文館主大橋佐平氏が設立を出願して、嗣子大橋新太郎氏により明治 35 年 6 月麹町上六番町(当時)に開館しました。当時まだ数少ない財団法人の図書館でした。
大正 12 年 9 月関東大震災により建物は 8 万 8 千余冊の蔵書と共に焼失しましたが、同 15 年 6 月麹町九段一丁目に 880 余坪の本館を建設、蔵書約 4 万冊をもって再開しました。
昭和 17 年頃には、蔵書 18 万冊を有する日本有数の私立図書館にまで発展しました。戦時中は統制会社等に建物の一部を使用されましたが、幸い戦災は免れました。
昭和 24 年 9 月図書館の建物が他に譲渡されたため、同年 12 月事務所を新宿区若宮町の大橋進一氏邸に移転し、翌年 3 月より同地で開館しました。
しかし、昭和 28 年 2 月大橋図書館は解散となり、その蔵書一切を西武鉄道の創設者である堤康次郎氏が引き継ぎました。当初は豊島園に図書館を設立する予定でありましたが、昭和 32 年 11 月港区芝公園に建設することになり、名称を財団法人三康図書館と改め、三康文化会館を建設してそれまで分散管理されていた蔵書を全部ここに集めました。
昭和 35 年 4 月、30 万冊収容を目標に 5 階建 1 万棚の書庫を建設しました。
昭和 39 年 6 月西武鉄道株式会社と大本山増上寺との協力で、仏教文化の研究を主目的とする三康文化研究所が設立され、同研究所附属三康図書館と改称することとなりました。
昭和 41 年 9 月研究所・一般閲覧室・講堂を増築し、同年 10 月 12 日蔵書 18 万余冊をもって一般公開されました。
昭和 54 年増上寺整備計画により、隣接地に 4 階建の明照会館を建設、その 1 階を図書館に当てることとなり、4 月移転完了して現在に至っています。

大橋図書館写真集

<http://sanko-bunka-kenkyujo.or.jp/sanko-toshokan/ohashiphoto.html>



http://sanko-bunka-kenkyujo.or.jp/sanko-toshokan/ohashitoshokan_2001.jpg

<http://sanko-bunka-kenkyujo.or.jp/sanko-toshokan/shomen.jpg>

帝国図書館：1906(明治 39)年 3 月建設 （建物は、現在の国際子ども図書館）

<http://www.kodomo.go.jp/about/outline/history.html>

国際子ども図書館の建物は、1906（明治 39）年に帝国図書館として建てられ、1929（昭和 4）年に増築された明治期ルネサンス様式の建物を再生・利用したものです。

1906（明治 39）年 3 月	帝国図書館建設
1929（昭和 4）年 8 月	帝国図書館第二期工事完成
1935（昭和 10）年 12 月	帝国図書館構内に図書館講習所竣工
1947（昭和 22）年 12 月	国立図書館と改称
1948（昭和 23）年 6 月	国立国会図書館開館
1949（昭和 24）年 4 月	国立国会図書館の支部上野図書館となる

建物の歴史

<http://www.kodomo.go.jp/about/building/history.html>

帝国図書館外観（明治期建築時）



帝国図書館外観（昭和期増築後）



http://www.kodomo.go.jp/img/about/building/pic_09.jpg

http://www.kodomo.go.jp/img/about/building/pic_10.jpg

東京市立日比谷図書館：1908(明治 41)年 11 月開館 （現在の東京都立図書館）

https://www.library.metro.tokyo.jp/guide/about_us/

都立図書館は、明治 41（1908）年に開館した東京市立日比谷図書館に端を發します。

<https://www.library.metro.tokyo.jp/guide/uploads/history.pdf>

明治 37. 3	東京市議会で通俗図書館の設置を決議
41.11	東京市立日比谷図書館開館
大正 元. 9	東京市立図書館処務規程制定
4. 3	東京市立図書館館則及び同処務規程改正、 日比谷図書館を中心とする東京市立図書館体制成立（19 館）
昭和 6. 4	東京市立図書館処務規程改正
18. 7	都政施行、都立図書館となる。
20. 5	都立日比谷図書館空襲焼失

〔東京市立日比谷図書館正面写真〕



<http://archive.library.metro.tokyo.jp/da/detail?tilcod=000000015-00229379>

東京帝国大学附属図書館：1923(大正 12)年 9 月関東大震災により焼失（現在の東京大学総合図書館）

https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/about/history/history_0/history_2

図書館再建（震災直後から昭和初期）

大正 12 年 9 月 1 日の関東大震災によって、東京大学も甚大な被害を被りました。中でも、深刻だったのは図書館の全焼でした。旧幕時代から受け継ぎ、築きあげられた所蔵図書が、瞬時に灰塵と帰してしまいました。その中には、マックス・ミュラー文庫や「古今図書集成」など和漢洋の貴重な図書が数多く含まれていました。わずかに、焼失をまぬがれた図書(「焼け残り本」)を残すのみとなりました。

東京大学は、震災後直ちに、図書復興委員会を組織し、図書の復興運動を開始します。幸いにも、国内から「南葵文庫」や「青州文庫」(一部)をはじめとして、多数の貴重な図書の寄贈の申し出がありました。さらに、震災直後より各国大使館から援助の申し出が多く寄せられました。国際連盟においても図書復興援助の決議が採択され、海外 30 数カ国から数多くの図書の寄贈を受けました。また、東京大学自身も多額の予算を費やし、内外の貴重な資料を購入しました。その甲斐あって、所蔵図書冊数は昭和 2 年に 55 万冊に及びにまで回復しています。

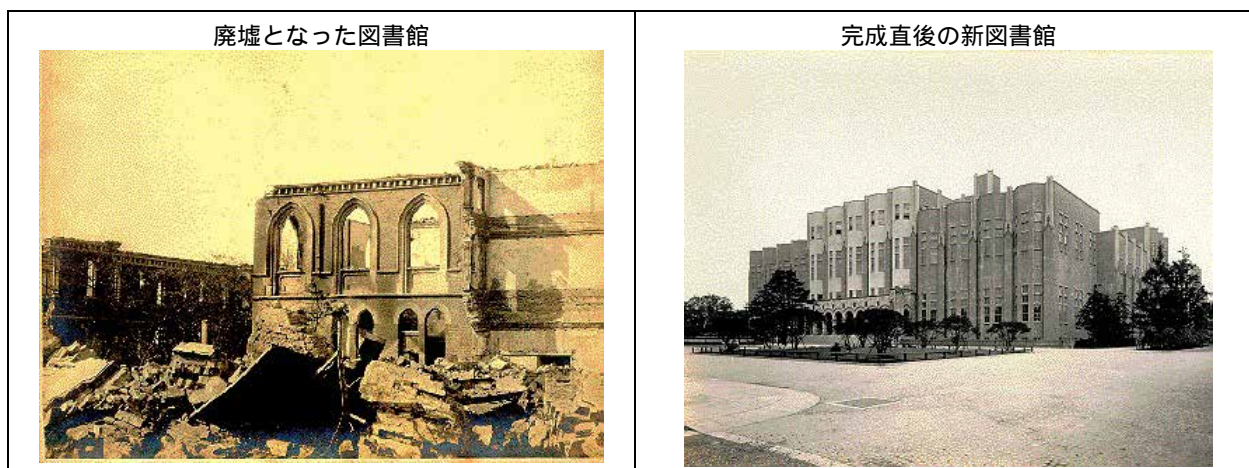
焼失した図書館についても、図書復興と平行して進められていきます。大正 13 年に図書館再建と図書の復興のためにジョン・ロックフェラー・ジュニア氏より 400 万円の寄付の申し出が寄せられました。東京大学は、即座にこの申し出を受諾し、これを財源にして新図書館を建設することを決定しました。直ちに古在由直総長を委員長とする図書館建築委員会が組織され、姉崎正治館長を欧米に派遣し、設計・設備について調査をおこないました。また、キャンパス構想全体も手がけていた内田祥三氏(当時営繕課長兼図書館建築部長で後に工学部教授、さらに東大総長となる)の設計監督の下で、具体的な新図書館の建設計画が進められました。大正 14 年末には、早くも設計が決定しています。

ちなみに新図書館の計画案については、立案した内田祥三と姉崎図書館長の間で激論が展開されたといわれています。内田祥三氏はキャンパス構想全体との整合性を唱え、姉崎館長は図書館としての機能を重視し設計の変更を主張しました。姉崎館長の主張は、各階の床高(内田氏の案では一階と二階の階高が大きく違っていた)を揃え、書庫と閲覧室の構造の大きな相違を避けることにありました。現在の建物をみると、当初の計画どおり、内田祥三氏の案に近いものに落ち着いたと推測できます。

翌大正 15 年には工事に着手。完成は昭和 3 年で、同年 12 月 1 日に竣工式を迎えています(以後 12 月 1 日は開館記念日となっている)。震災の教訓を生かし、鉄骨鉄筋コンクリート造りで頑強な構造を備え、地下一階、地上三階、中央部のみ五階であり、内側には 7 層の書庫が設けられました。外壁には淡褐色のスクラッチ・タイルを貼り、ゴシック風の細部とアーチをもつ入口を用いた外観のデザインは、キャンパスの他の建築物と均しく調和がはかられました。

関東大震災後の写真(出典:リーフレット「総合図書館の歴史と現在」(PDF))

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/sites/default/files/files/2017-08/100-history.pdf>



海外からの図書の寄贈

震災後、実に多くの外国政府から多数の図書の寄贈がありました。昭和3年末時点での総数は約29万冊（下表参照）。その内容も世界的に貴重なものが多数含まれています。こうした海外からの好意によって、図書の復興を短期間のうちに成し遂げることができました。

各国寄贈図書数（昭和3年10月末時点）

アメリカ合衆国	92,750
（1.ハーバート大学）	(5,600)
（2.E・モース教授）	(12,075)
（3.N・Y・C 図書館協会）	(4,825)
（4.エール大学）	(4,025)
（5.その他）	(66,225)
アルゼンチン	200
オーストラリア	875
オーストリア	1,050
支那	21,900
（1.広東救災委員会）	(7,300)
（2.北京大学）	(9,685)
（3.その他）	(4,915)
カナダ	1,050
チェコスロバキア	192
ダンチヒ	1,050
デンマーク	2,275
イタリー	5,956
（1.伊国政府及び人民）	(5,256)
（2.バチカン）	(700)
ベルジウム	7,443
蘭領印度	200
エジプト	175
エストニア	200
フィンランド	444
ドイツ	35,350
スイス	8,929
英国（植民地を除く）	66,493
（1.英国学士院）	(30,625)
（2.英国政府）	(32,725)
（3.その他）	(3,143)
ギリシャ	900
ハワイ（ハワイ大学）	875
ハンガリー	30
印度	700
印度支那	525
フランス	17,524
（1.フランス人民）	(3,675)
（2.ギメ博物館）	(8,575)
（3.その他）	(5,274)

ニュージーランド	175
フィリピン	175
ポーランド	274
ポルトガル	175
オランダ	8,760
（1.東京帝大救援委員会）	(7,875)
（2.その他）	(885)
メキシコ	26
シャム	1,268
スペイン	2,300
スエーデン	750
労農口シヤ	11,012
（1.ソヴィエツト対外文化協会）	(10,662)
（2.その他）	(350)
総計	292,341

（帝国大学新聞昭和3年12月1日付けより作成）

https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/about/history/history_0/history_3

戦中・戦後の総合図書館

震災から劇的な復興を遂げた総合図書館(当時は「本館」と呼ばれていました。「総合図書館」の名称は後に付けられたものです。)でしたが、今度は、戦争の被害によって、壊滅的な被害を受ける可能性がでてきました。昭和19年、空襲が避けられない情勢となり、図書館の貴重な資料を守るために、総合図書館は貴重書疎開を計画しました。山梨県市川大門の元青洲文庫があった建物が空き家になっており、そこを疎開先に決定し、当時の市河三喜館長の陣頭指揮の下で、職員総出で作業をおこないました。このときの疎開図書は、インキュナビュラをはじめ、木内文庫のカント著作及び関係古版本、キリシタン関係貴重書、16～18世紀の貴重書など約2千冊でした。これをタバコの空き箱3百個に詰めて、秋葉原駅から現地に送ったそうです。日ごとに物不足、交通事情の悪化が深刻となっていた頃で、たいへんな作業であったと伝えられています。

震災で大打撃を受けた図書館でしたが、太平洋戦争で東京一帯が焼け野原となる中で、幸運にも、空襲の被害を全く受けずに済みました。本郷界隈はほとんどが火災で焼失したものの、図書館建物に延焼することはありませんでした。一説には、東京大学周辺に植えられた樹木が防火林の働きを果したといわれています。しかしながら、直接の被害は受けなかったものの、予算・物資の窮乏や人手不足のため、総合図書館の図書館業務は著しい停滞を余儀なくされ、利用も激減しました。